

「授産施設支援」事業

大阪府遊技業協同組合(以下大遊協)が取り組む「授産施設支援事業」は、障害を持つ人々が社会復帰・社会参加を目指して働く授産施設(福祉作業所)「SELP(セルフ)」への支援活動である。単に金銭的な援助にとどまるのではなく、その自助・自立の精神を尊重した支援を行っていることが高く評価されている。

● 大阪府遊技業協同組合
----- 組合員数 1,027人



段為 梁 理事長

人々が自由で公平な生活を営み、維持していくことは誠に困難です。ですが、誰もが住みよい社会を作るための社会貢献活動を推進することで、これに寄与することは可能です。このたびの受賞を励みとして、関係者一同、さらなる活動の充実に取り組んでいきたいと思います。

社会福祉賞

選考理由



社会貢献活動審査委員会 委員
山下 頼充 氏

障害者の方々が社会復帰・社会参加を目指して働く授産施設。そこで生産された商品を長年にわたってあまり玉景品として購入するとともに、各施設から強い要望のある福祉車両の提供も継続して実施しています。また、授産施設との意見交換やラジオ番組での啓蒙等、単なる経済的な援助でなく、障害者の自立を推し進める積極的な支援活動を高く評価しました。



授産施設で生産されている商品の一例
1.押し花額 2.一筆箋・和封筒セット 3.巾着 4.ウッディペル 5.ストラップ 6.粋せっけん

現実的な視点から
障害者の自立を支援

大阪府下に約450か所存在し、約5,000人の障害者が働くSELP。その名称は、自立(SELF)と自助(HELP)から作られた造語で、この授産施設の最大の目的でもある。

大遊協では、SELPの活動主旨を理解・尊重し、根本的な支援を行うために、SELPで生産された商品をホールに仕入れ、あまり玉景品としてお客様に提供するという事業を平成10年(1998年)から展開している。SELPとホールとの間で「純粋な商取引」の関係を構築することで、障害者の自立を推し進めるための経済的・精神的な支援を行う意図がある。

平成18年度のSELPと大遊協との取引は1,672万円であり、累計では9,000万円以

上のにぼる。これは、大阪府下の全授産施設の販売収入全体の約37%に当たる。今後は、あまり玉景品用の商品だけでなく、ホールで使用するゴミ袋やダスターといった消耗品の仕入れにも裾野を広げていくほか、大遊協が支援する各種イベントにもSELP商品活用の輪を広げていくという。

授産施設への積極的な
支援・啓蒙活動を実施

SELPで働く障害者にとって、移動や日常生活では車両が不可欠だが、慢性的な福祉車両不足に直面していた。大遊協ではこの実情を踏まえ、従来大阪府・大阪市に寄贈していた年間各1,000万円の支援金を、授産施設への福祉車両贈呈に変更。平成15年(2003年)から継続しており、これまでに

計69台を贈呈している。現在では、各関係施設から車両の贈呈希望が寄せられるなど、事業に対する認知度・評価は年々高まっている。引き続き、200台の車両贈呈を目標として継続推進していくという。

さらに大遊協の取り組みは広がり、平成18年(2006年)8月、JR大阪駅構内において開催された障害者スポーツの写真展『トリノまでの歩み』に特別協賛。この写真展を授産施設とSELP商品の認知向上への広報の場として活用し、授産施設で働く障害者による作業の実演や、SELP商品の配布等を実施。

また、同年4月から12月にかけて、ラジオ番組「FM802」において「HAPPY FUN RADIO 大遊協STYLING BOOKS」と題して、放送の中でSELPの啓蒙と、一連の大遊協の取り組みを告知。番組プレゼント用のグッズをSELP商品で制作する等、授産施設事業への理解を広く呼びかけた。こうした地道な努力は、ラジオ局担当者や番組リスナーからの賛辞、大遊協の活動へのボランティア参加の申し出等のかたちで、着実に実を結んでいる。

現場と現場との意見交換で、常に適切な事業運営を

毎月開催している「社会貢献委員会」は、授産施設支援事業のさらなる向上・発展を目指す意見交換の場。大阪府社会福祉協議会のSELP商品担当者を招き、現場の実態や環境、問題点等について協議している。

また、平成18年(2006年)3月には、社会

貢献委員会と大阪府授産施設事業振興センター、そして授産施設の指導長・指導員の方々と交流会を開催。作業や商取引についての率直な意見や要望を交わしたという。大遊協では、こうした支援の現場との積極的な交流を通じて、事業の適切な運営を日々模索するとともに、授産施設の精神的な支えになり得よう努めている。



平成18年(2006年)12月に行われた第8回福祉車両贈呈式の様子



大阪駅で開催された障害者スポーツの写真展の様子

社会貢献活動の現場より 「障害者を取り巻く現実を見つめ、さらなる活動の推進と継続を」

障害者スポーツ写真展会場での作業実演や、街頭での資料配布活動等、授産施設で働く方々と時間を過ごして強く印象に残るのは、その純粋でひたむきな姿勢です。例えば、街頭で通行人に何とか資料を受け取ってもらおうとするときの彼らの姿は、懸命さと使命感にあふれています。

こうした“人の善意しか知らない”方々とふれあうとき、彼らの背後におられるご家族、また授産施設の職員の皆様も、半ば閉ざされた

社会のなかで黙々と献身的に尽力されてきた歴史の重みを意識せずにはいられません。

私たちは、授産施設で働く方々を取り巻く現実から目をそらすことなく、事実を正しく伝える方法を模索し、またその力を強化していくことが必要だと考えています。そして、これまでの活動によって生まれたささやかな成果の「輪」をいかに広げていくかを模索しながら、これからも頭と心を使い、汗をかきながら取り組んでいきたいと思っています。

